

氏名	もり たに り え 盛 谷 理 絵		
学位の種類	博士（芸術文化学）		
学位記番号	甲博文第 15 号		
学位授与の日付	平成 27 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当（課程博士）		
学位論文題目	沖縄本島におけるリュウキュウアイの泥藍つくりに関する研究		
論文審査委員	主査 教授	井 関	和 代
	副査 教授	山 縣	熙
	副査 教授	下 休 場	千 秋
	九州栄養福祉大学・非常勤講師	鳥 丸	知 子

内容の要旨

南北に細長く延びる我が国には、世界的に稀有な例として、アブラナ科、タデ科、マメ科、キツネノマゴ科の 4 科の藍植物が生育する。そして、それらの種類の違いによって、生育地や染料化への方法が異なり、その結果、それらの染色後の青色の色調にも僅かながら違いが生じる。

そのような藍植物の中で、原産地を印度のアッサム地方とするキツネノマゴ科のリュウキュウアイ（琉球藍、*Strobilanthes fiacidfolius* Nees Lour.）は、沖縄本島の北部・伊豆味地域で栽培されている。その藍植物を研究対象に、現地調査を計 13 回（修士課程 7 回、博士課程 6 回）行い、それらの調査資料と参考文献、先行研究とを精査して、沖縄におけるリュウキュウアイの染料化（泥藍）の現状や歴史的・社会的・文化的背景を探り、「泥藍つくりの様相の変化」について民族芸術学的視点から論じたのが本論文である。

本論文の構成は、大きく二つの部分からなる。ひとつは藍植物とは如何なるものかについて、参考文献や先行研究の紹介した「序章」と「第 1 章 藍植物の概要」「第 2 章 地域別の藍植物による染料化（製藍）」である。他のひとつは現地調査資料に基づき、「第 3 章 調査地・沖縄県国頭郡本部町伊豆味について」、「第 4 章 リュウキュウアイ沈殿法（旧製藍法）の略史」、「第 5 章 沖縄・伊豆味の沈殿藍製造

の現状」、「第6章 泥藍づくりの新たな動き」、「第7章 中国・南部沿岸地方と沖縄における泥藍づくりの比較」、そして総括としての「結びにかえて」である。

「序章」では、本研究の動機を述べると共に、論文作成に関わる文献資料と先行研究について紹介し、本研究の目的とその方法について述べている。

そして、「第1章 藍植物について」では、藍とはどのような特性を持つ植物であるかを探り、アブラナ科、タデ科、キツネノマゴ科、マメ科の4科の藍植物について、多くの参考文献を挙げて、その概要や歴史的背景を記述している。続く「第2章 地域別の藍植物による染料化（製藍）」では、藍植物を種類別にして、各々の特性について紹介することを通して、藍植物の染料化とは如何なるものであるかという問いに肉迫している。

第3章から第6章では、現在の沖縄でのリュウキュウアイについて、その栽培地・伊豆味における調査資料に基づき、現在のリュウキュウアイの在り方について考察を行う。

「第3章 調査地・沖縄県国頭郡本部町伊豆味について」では、リュウキュウアイの主な栽培地である沖縄本島・本部町伊豆味を中心に、気候・地形・土壌・植生などについて述べて、この地域の自然環境を紹介する。また、調査地の概略史を述べると共に、人びとのくらしや年中行事、さらには農耕暦などの社会環境を共に取り挙げ、農作物であるリュウキュウアイとの関わりを考察している。

「第4章 リュウキュウアイ沈殿法（旧製藍法）の略史」では、第5章で触れた、沖縄の人びとのくらしの中で栽培されてきたリュウキュウアイを、中世以降からの文献資料を挙げて、泥藍づくりの変遷を「管理期」「成長期」「最盛期」「衰退期」「衰耗期」そして現在の「保護期」と区分し、リュウキュウアイの概略史をたどる。また、昭和40年代まで伝承されてきた伝統的な製法（以後ここでは、旧製法と記述する）を紹介してゆく。

「第5章 沖縄・伊豆味の沈殿製造の現状」では、現在、商品としての泥藍づくりを一手に担う琉球藍製造所・伊野波盛正氏の新製法（以後、ここでは新製法と呼び、旧製法と区別する）による泥藍づくりをベースに調査・研究し、今日の製造法に至るまでの歴史的経緯を辿る。また、同製造所のリュウキュウアイの栽培から製造までの現状を紹介した後に、伊野波盛正氏の行う社会活動（泥藍づくりの普及のため）についても紹介する。

さらに「第6章 泥藍づくりの新たな動き」では、第5章で述べた、伊野波盛正氏の社会活動の成果として誕生した新たな製造者や復興してきた旧製法による泥藍製造者を取り上げて、その工程について報告する。また、リュウキュウアイを農作物として栽培し、伊野波盛正氏の運営する「琉球藍製造所」に納める、栽培農家の実情についても明らかにしてゆく。

続く「第7章 中国・南部沿岸地方と沖縄との泥藍づくりの比較」では、中国・明末期や清初期の王朝が、琉球王国との交易港として、中国南部沿岸地方である、かつての閩州（現・福建省を中心とする）の泉州港を、そして後に福州港を定めたという事実から、沖縄で現代にまで伝承されている中国文化の

影響の多くは閩に辿れると指摘する。そして、沖縄の「泥藍つくり」のルーツも中国・南部沿岸地方ではないかと推測し、現中国の浙江省・坭垵村と福建省・書峰村での泥藍つくりの現地調査を行ない、その調査資料を報告している。また、この二地域と沖縄の旧製法にみられる泥藍つくりを、その技術、また用・道具についても比較検討し、その類似点と相違点を明らかにしてゆく。そして、中国・南部沿岸地方から沖縄へのリュウキュウアイとその製藍技術との伝来についても推考する。

終章となる「結びにかえて」では、本論文の総括と「沖縄におけるリュウキュウアイと人びとの関わり」について考察し、また、今後の研究課題とその展望についても論述する。

（図 37、写真 126、地図 9、表 22、150,121 字）

審査結果の要旨

沖縄の「泥藍つくり」の従来の研究では、主に本部町伊豆味にある「琉球藍製造所」とその運営を行う伊野波盛正氏の「泥藍つくりの技術」に焦点を当てた報告が多くなされてきた。しかし、伊野波氏の「泥藍つくり」を支える「リュウキュウアイの栽培農家」についてはその射程に収まらず、これまで研究の対象として取り上げられることは殆どなかった。そこで、本論文では、リュウキュウアイの栽培とその染料化の双方を視野に入れて、その技術的背景や歴史的側面、社会的側面を検証し考察を行なうことを目的とした。

申請者は、本学工芸学科テキスタイル染織コースを専攻し、その卒業作品に「藍染め絞り」を制作した。その制作過程において次第に「藍染料」そのものに魅かれ、本学大学院・文化化学博士課程前期に進み、研究対象として沖縄で栽培されるリュウキュウアイの研究に着手し、平成 23 年度に修士論文「沖縄本部半島における琉球藍の研究 ―伊野波製藍所を事例に―」を提出した。そして、博士後期課程では前述した「リュウキュウアイの栽培農家」の動向を追調査・研究するとともに、沖縄・伊豆味の泥藍つくりの新しい動きや、未だ明らかにされていない沖縄の泥藍つくりのルーツを探るために、中国・南部沿岸地方の泥藍つくりの現地調査を行い、それらについての論証を行った。

本論文は、大きく二つの部分から構成されている。

まず、序章と第 1 章、第 2 章では「藍植物と染料化について」をテーマに、先行研究の紹介と、リュウキュウアイを含む代表的な 4 科の藍植物の概要について述べた。

次に、第 3 章から第 6 章までは、現在の沖縄でのリュウキュウアイについて、その栽培地・伊豆味における調査資料に基づき、その在り方についての論述、第 7 章では、中国南部沿岸地方に伝承されてきた泥藍つくりと沖縄の泥藍つくりとの技術を比較検討、その関連性を探究、そして最後の「結びにかえて」で本論文の総括を行なった。

「序章」では、研究の動機と経緯、文献資料、先行研究、研究方法、研究目的、論文の構成について記述している。

「第1章 藍植物について」では、序章で紹介した先行研究を踏まえて、藍植物の代表的な4科（アブラナ科、タデ科、キツネノマゴ科、マメ科）について、その概要や歴史的背景について考察し、藍植物栽培とその利用の盛衰を追った。1880年に合成染料「インディゴピュア」が登場したことにより、天然の藍染料が衰退の道を辿る経緯が論述される。

「第2章 地域別の藍植物による染料化（製藍）」では、各藍植物の染料化の技術的背景に触れ、その展開を紹介している。そして、藍植物による染色方法が、季節の限られた原始的な「生葉染め法」から、生葉を加工（製藍）して染料化させ「アルカリ性水溶液」でインディゴ成分を発酵させる高度な技術へと転換してゆく様相を明らかにした。

「第3章 調査地・沖縄県国頭郡本部町伊豆味について」では、調査地・本部町伊豆味の地形や気候といった風土条件が、リュウキュウアイの生育に適した地域であることを述べた。また同町の人びとが、現代にあっても日々の暮らしの中で重要視している年中行事（農耕暦）の祭祀を紹介して、それら祭祀の中にリュウキュウアイが供物として登場しないことに着目し、沖縄本島へのリュウキュウアイの伝来が年中行事（農耕暦）の定着した以降であると指摘した。そして、その始まりの時期を中国との交易に求め、沖縄本島におけるリュウキュウアイの栽培とその利用は、室町時代以降であることを示唆する。そして、旧暦が広く普及する江戸時代・中期以降になって、リュウキュウアイが本部半島でも栽培されるようになり、江戸末期から明治初期にかけてその栽培が盛んに行われるようになった、と推察している。

「第4章 リュウキュウアイの沈殿法（旧製法）の略史」では、中世から現代までの沖縄の「泥藍づくり」の概略史を六つの時代に分けて辿り、伊豆味において、何故、泥藍づくりが伝承されるようになったのかを探ろうとした。そして、廃藩置県以降の明治12（1879）年に、無禄となった士族に対する授産目的で、開墾政策「大原開墾」が行なわれ、本部町や多くの先島などで開墾が促進され、本部町の「泥藍づくり」は、明治時代のこの開墾の結果が現代にまで繋がっていると指摘した。また、沖縄における泥藍の普及は、薩摩藩が琉球へ侵攻した後の、慶長16（1611）年に、モメンの種が沖縄にもたらされ、その栽培が広まり、一般庶民の衣類に木綿布が普及した以降のことであると推察した。そして、本土でも同様にタデアイによる藍染めが木綿布の普及とともに広がったことを挙げた。また、そのことを物語るように、沖縄本島における木綿布以前からの伝統的染織品・国頭の芭蕉布を挙げて、緋模様の一部にのみ藍染めが行なわれていた程度であったと指摘する。そして、正装衣としての藍染め木綿布は「花織」などに限られることや、さらに、泥藍を使用した伝統的染織品の多くは、南風原「琉球緋」や薩摩藩への納税対象となった宮古島「宮古上布」などであり、それらは量産体制によって生産されてきた布であり、その他の伝統的染織品に使用される泥藍（藍染め）の使用は、木綿布が普及した後の藍染めに比べ

ると大きく下回っていることを挙げた。

「第5章 沖縄・伊豆味の泥藍つくりとその現状」では、琉球藍製造所の概略史を述べると共に、その運営者である伊野波盛正氏が旧製法を改良し、考案した新製法の泥藍つくりの方法を紹介した。また、同氏がリュウキュウアイの栽培や泥藍つくりを単に担ってきただけでなく、その技術を講習会で教えるなどの社会普及活動を行ない、近年、その社会活動が実を結び、旧製法による泥藍つくりが再び始まったことについても報告している。

「第6章 泥藍つくりの新たな動き」では、旧製法による「泥藍つくり」の指導を伊野波盛正から受けて、その結果、近年に始まった染色作家たちによる泥藍つくりの新たな動きと、原材料であるリュウキュウアイを栽培する契約農家をめぐる現状とその課題について考察し、旧製法による泥藍つくりの伝承とリュウキュウアイの保存・栽培の重要性を指摘している。

「第7章 中国・南部沿岸地方と沖縄との泥藍つくり比較」では、沖縄の泥藍つくりのルーツとして、中国の「閩州」を考え、中国・南部沿岸地方二カ所における現地調査に基づき、リュウキュウアイの栽培の現状、泥藍つくりの工程、さらにはその利用について詳細な分析を行ない、作業場の立地条件、作業槽の形状と構造、作業に用いる用・道具類を、沖縄の旧製法による泥藍つくりのそれらと比較検討を行なった。その結果、中国・南部沿岸地方と沖縄の旧製法の「泥藍つくり」には、多くの類似点があることを明らかにした。さらに、リュウキュウアイの沖縄への伝来を14世紀後半（室町時代）とすると共に、「閩州」を出身とする中国人が居住した首里近くの久米村から沖縄本島各地に拡まったと推測している。

終章となる「結びにかえて」では、沖縄の伊豆味の泥藍つくりに関する本論文の研究目的に関する総括を行い、泥藍つくりの技術の保護だけでなく、その用・道具の保存や原材料となるリュウキュウアイの保護、また、その多様な利用を提言している。

以上のような内容の本論文に関して、主査・副査一同、詳細な文献調査と現地調査に基づく緻密な分析・論考を高く評価した。さらに副査・下休場は本論文を「沖縄におけるリュウキュウアイの泥藍つくりの文化史的研究として位置づけることができる」と評価し、また副査・鳥丸も「中国・浙江省及び福建省での泥藍つくりに関する報告は、これまでの日本ではその詳細な報告がなく、現地調査にもとづいた研究報告は、本論文の価値を更に高めた」と評した。

また、副査・山縣からは「各章を完結させる記述方法がとられたために、内容的に多少重複する部分が見られることや、その一方で、記述が省略されている箇所があり、論文全体の論旨を煩雑にしているが、論文の中に引用される同一文献の記述に工夫を加えることによって、さらに、申請者の論旨が鮮明になるであろう」という指摘があった。

しかしながら、これらの指摘は本論文が近い将来、刊行物として公開される際の留意点にすぎず、今後の申請者の研究への課題としての提言である。

以上のことを総合して、本論文は今後の研究の可能性をも示した力作であると、審査員一同はそれを高く評価し、博士論文（芸術文化学）の学位申請論文に十分に価値するものと認定した。